



第二六七号 一一〇一四年七月一一日  
発行者 立教英國学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND  
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE  
<http://www.rikkyo.co.uk>

立教英國学院に入学して  
高一一二 杉谷 玲奈

私は東京に住んでいました。髪の毛を三つ編みにし、緑色の制服を着て、千葉県にある女子校に九年間通っていました。父がイギリスで仕事をすることになり、私も父のいる場所で英語や音楽を学びたいと思い、この立教英國学院に入学しました。

前に通っていた学校とは環境が変わり、家族と別れる寂しさや不安でいっぱいでした。でも他の新入生や在校生、先生のみなさんが優しく接してくださるので、安心してこれからこの学院で過ごしていくけです。

私は将来、歌つて踊れるアーティストになりたいと思っています。だから演劇部で練習を頑張ります。

フライデースポーツでは、この学校でしか出来ないと思い乗馬を選びました。プライベートレッスンはギターと英語を選択し、私の将来の夢に近づけるように特技を増やしていきたいです。

私は小さい頃にパキスタンに住んでいました。そこでは遠くの教会から自爆テロの音が聞こえてきました。車に乗っている男の人に窓をコンコンとノックされ、「お金をください。」とお願いされました。今までその光景が強く頭に残っています。私がパキスタンで通っていた幼稚園では、周りの人々がほとんど外国人だったので、コミュニケーション力がつきました。だから、私は立教英國学院で、英語、音楽を学んで将来歌つて踊れるアーティストになり、そこ

で得た収入で貧しい人々を助けたいです。

私は、小さい頃に学んだこと、立教英國学院でこれから学ぶ事を活かし、人を幸せにできる人になれるよう頑張ります。



## 入学・新学年を迎えて

赤ネクタイの重み

高三一二 七條 莉奈

春休みが終わる頃、私はずっと赤ネクタイをつけた高三を想像していました。そしていたいことをやつていた。そこで帰つくると、高三のみんなが新入生の案内など自分が任された仕事をしていて頼もしく見えた。

高一のときは、私はクラスの友だちと一緒にいたいことをやつた。やつて、立教英國学院でこれから学ぶ事を活かし、人を幸せにするように思つた。周りをあまり見ず、自分勝手に楽しむことばかりしていた。

高二になつて責任のある仕事を任され、学校の運営の中心になり学校行事を動かすようになった。例えば体育委員としての行事は今まで楽しむだけのものだったが、これによって、今まで先輩方が陰で運営してくれていたのだと気付き、感謝の気持ちを知つた。それと同時に小さな責任感が生まれた。去年の先輩方が教えてくれたことや残してくれたことをしつかりなしとげるという責任と、学校の中核を担うことに対する責任であつたと思つ。

そして今、私は高三になつた。部長、委員会、係本部などはもうすぐ引退して勉強に励むことになるだろう。しかし高三にも高二とは違う責任がある。始業式の日、私は達高三は全校生徒の一一番後ろに座つた。ここで私は今まで私たちの前で手本となってくれた先輩がいないこと、後輩たちを支えていかなくてはならないことに気付いた。これからは自分達が良い手本とならなくてはいけないと感じた。そう思うと、青ネクタイより赤ネクタイの方がずっと重く感じた。「赤ネクタイは責任の証だ」と校長先生がおっしゃっていた事を聞いて生活していると思う。

### 一目次

入学・新学年を迎えて	ページ
球技大会	1
ミレースクール体験記	2 ~ 3
Japanese Evening	4
ホームステイ	5
Girlguiding	6
現地校との交流	7
ミニ・アウティング	7
部活動を通して	8 ~ 9
第3回 チャプレンより	10 ~ 11
*コラム*	12
ブルーベル見学	6
ウィンブルドン テニス観戦	10



# 球技大会

球技大会

中一 鮎田 忠治



今回、入学後初めての球技大会があり、水色のサッカーへ入りました。色々と分からぬこともありますましたが先輩達の分かりやすい指導のもと、人生初のゴールキーパーをやらせてもらいました。今までゴールキーパーをやつたことがなかったので、ワクワクしたけれども、きん張して本番はガチガチでした。いつもはこんなボール、キヤソチできるだろうと思いつ眺めしていましたが、実際、キーパーをやつてみると、とても奥が深く、なかなか試合中にはサボれない職でした。

練習後はいつもドロドロで、真っ黒でしたが、努力がもつと体に付き、そして落ちず、中身から変わって行きました。本番までに一生けん命作ったユニフォームは一生の宝物です。

そして本番やはり努力が足りませんでした。実戦こそ、思いつきりぶつからなければならぬのに、きん張のせいか、思つたように体が動かず、止められる所も、入れられてしまい、後の祭となつてしましました。このことをバネに、これからがんばります。この球技大会で、百パーセント練習しても、結局よくは六〇パーセントぐらいしか出せない。という事を学んだので、百パーセント試合で力を発揮したいから、百四〇パーセント以上練習しなければ、と思いました。

来年も、もしもやらせてもらえるならば、全力でキーパーをやりたいと思つています。

「おつかれさま」  
高二一一 平栗 義貴  
そんな言葉を、得点を集計し終えた直後に委員長に言われた。

二月の中頃からいろいろと準備をしてきて、それが当日を迎える無事に終了した。自習時間を使つたり、ブレイクを潰して話し合つたり、何もかもがとてもなく大変だった。

球技大会が全校の皆さんにとって楽しい思い出になるように、そんなことを言つた気もしたが、現実は甘くない。苦手なスポーツをしてもらつたり、仲良くない人同士で全體競技のペアを組ませてしまつたり、不平や不満がいろいろなところから聞こえてきた。全て投げ出して、球技大会そのものを無くしたいと本気で思ったことさえあった。それでも準備を最後までやり遂げることが出来たのは、委員長のお陰だと思う。

当日の朝、そわそわしながら礼拝の席に座っていた。僕が抱いていた不安はたつたひとつだけだ。「ミッション・サークル」…全體競技のひとつで、僕たちが考えた競技だ。準備に時間がかかることが予想された。

ひとつ目の全體競技、五人六脚が終わり、急いで準備にとりかかつた。走りまくったが、間に合わない。ほとんどの人が何をしたらしいのか分からず混乱している中、助けてくれた人たちがいた。去年体育委員だった高校三年生と、代表キャラブテン達だった。チームをまとめて、僕らが進行しやすいうようにしてくれた。それは流石としか形容できず、改めて先輩達を尊敬した。

今年の球技大会で学んだことは、人を頼り、また助け合い、感謝すること。そして、これがどんな仕事を行うときにも大切なものなのではないかと思う。



## 初めての球技大会

高二一一 小林 奈乃子

私が立教英國学院に来てわづか一週間と少しで、球技大会の練習が始まった。運動はあまり得意でなく新しい生活にもまだ慣れきつていな私だったが、学校の雰囲気が大会に向けて徐々に盛り上がり行くのを感じて、なんだかわくわくした気持ちになつた。

バレー・ボールやバスケットボールは経験のある、運動好きな人が集まりそうだなと思い、みんなで楽しめそうなドッヂボールに参加することにした。しかし、練習が始まると私の考えは間違つていたと思いつらされた。参加者の後輩達の目が皆本気だつたのだ。ただボールをよけるだけではない。投げられたボールを受けとめ、そして相手に向かって本気で投げてぶつける。強い信念を感じて、私も気を引き締めて練習に励んだ。

「新入生の先輩」という立場は、少し大変だつたが、しつかりした後輩達と、頑張ってくれたキャプテンに助けられ、真剣に練習に取り組むことが出来た。

本番ではいきなりジャンプボールをまかされとても緊張した。練習で相手チームと対戦することは出来なかつたので、相手の実力が分からず、私達のチームは苦戦した。なんとか頑張つて、一ゲーム勝ち取つたが、午前中の試合は負けてしまつた。このまま午後も負けてしまつた。この気合いを入れ直して、午後の試合に挑んだ。昼食後はチーム全体のテンションが上がつた状態で試合をすることが出来た。声出しも皆でできだし、真剣かつ笑顔でドッヂボールができて楽しかつた。

結果は引き分けだつたが、午後の試合で勝てたことはとても嬉しい思い出になつた。テニスやバドミントンと違つて、バレーは団体競技です。そして僕は団体競技が嫌いです。自分一人の力で勝つことが不可能で、自分が仲間の足を引っ張ることもあるからです。球技大会前の僕は団体競技を、「仲間に迷惑をかけないよう」にプレーする」という少々堅苦しいものだと考えていました。この時キャプテンの S が「バレーを楽しんでやろう」と言つたのですが、この言葉が大会前と後で僕の考えを変えるきっかけになりました。その考えが変わることのないまま、僕は球技大会当日を迎えました。全体競技が終わり、いよいよ午前のバレーの試合が始まりました。結果から言うと、午前の試合は負けました。○対一のストレート負けです。しかし僕は大満足でした。なぜか今回の試合は今まで経験したことがないほどに楽しかつたのです。初めて団体競技を楽しいと思つた瞬間でした。

「今まで持つていなかつた何かをつかんだ。」

そんな気持ちを抱きながら午後の試合が始まつて、そして驚きました。そこにいるメンバーは午前と同じなのに、まるで別物のようなチームになつていたのです。普段全く言葉を発さなかつた K 君は「ナイス！」が楽しい、試合に勝ちたい」と思い、「バレーがひとつになつたと感じました。

## 団体競技の楽しさ

高三一二 今井 駿汰

テニスやバドミントンと違つて、バレーは団体競技です。そして僕は団体競技が嫌いです。自分一人の力で勝つことが不可能で、自分が仲間の足を引っ張ることもあるからです。球技大会前の僕は団体競技を、「仲間に迷惑をかけないよう」にプレーする」という少々堅苦しいものだと考えていました。この時キャプテンの S が「バレーを楽しんでやろう」と言つたのですが、この言葉が大会前と後で僕の考えを変えるきっかけになりました。その考えが変わることのないまま、僕は球技大会当日を迎えました。全体競技が終わり、いよいよ午前のバレーの試合が始まりました。結果から言うと、午前の試合は負けました。○対一のストレート負けです。しかし僕は大満足でした。なぜか今回の試合は今まで経験したことがないほどに楽しかつたのです。初めて団体競技を楽しいと思つた瞬間でした。

結果は○対一からの逆転勝利でした。勝つたときのうれしさは本当に今までにないもので、言葉にするなら「完全燃焼」といえると思います。

球技大会から三日過ぎた今、団体競技は他人のミスで歯がゆい思いをすることもあるけれど、一人では達成できないことをチーム全体で支えあい、六人が六人分以上の力を発揮できるすばらしいものであると思っています。バレーの楽しさ、団体競技の楽しさを知った今回の球技大会は、僕の中で忘れられない思い出になりました。

## 【1学期の行事】

4月 13日	入学始業式、避難訓練
4月 14日	健康診断、オリエンテーション、ブルーベル見学
4月 15日	高等部実力テスト
4月 20日	クラブ活動・委員会紹介
4月 26日	球技大会
4月 27日	聖餐式
4月 29日	午後ブレイク
5月 4日	全校体力測定
5月 9日	Japanese Evening
5月 12日、14日	全校歯科検診
5月 15日	IGCSE Exam (Biology)
5月 16日	ミニ・アウティング (P5~H2)
5月 24日~6月 1日	ハーフターム
6月 4日	First Certificate in English
6月 7日	実用英語技能検定一次試験(準1級、1級)、 Certificate in Advanced English
6月 8日	第69回漢字書き取りコンクール、 実用英語技能検定一次試験(2級以下)
6月 14日	Preliminary English Test、 Key English Test
6月 15日	生徒会主催 ギルフォードショッピング
6月 24日~28日	期末試験
6月 29日	聖餐式
6月 30日	ウィンブルドン テニス観戦
7月 1日~2日	答案返却
7月 3日	スクールコンサート
7月 5日	終業式、生徒帰宅
7月 6日~11日	夏期ホームステイ
7月 7日~11日	高等部3年夏期補習



# ミレースクール体験記

"See You Again!"

H2 Miyu Mimura

春期休暇中、中3、高1の女子生徒が近隣のMillais Schoolでの1週間の交換留学のプログラムに参加しました。参加者はホームステイ先から学校に通い、授業に参加しながら様々な文化交流の機会をもちました。

I rode on a mini bus, which took me to where Millais students were waiting with great expectations. I looked up to see the familiar broad blue sky, and vast grassland, and overgrown trees through the window with hope for new experience in mind.

At the meeting point, there were faces which we hadn't seen for a while. We hugged each other in delight. Then each of us went to our home for the week. My partner, Phoebe, and I were quiet in a car. I felt somewhat strange and nervous because we hadn't met each other for a while. Her mother, Sally talked to us to fill the silence. We drove through a beautiful colonnade to get to their house. It was a warm, sunny day, and trees cast a light shadow on the road.

This experience during my one-week exchange felt so short. I can remember all events clearly. They are amazing. I can't write about all the events because there were too many amazing events. So I will write about some of the great experiences during my exchange.

First, about Millais School. I felt time went so fast when I was at Millais School. Everything in that school was new and surprised me. This is the reason why time spent in Millais school was so precious for me. I wanted to feel and understand different culture, and therefore I entered this Rikkyo School in England, and applied for this student exchange with Millais. But the time spent at Millais School made me realize how difficult it is to understand another culture. There are not only good things but also some bad things. We were introduced to our partners' homeroom classes. However, the people in the classroom were not so excited to see us. I thought the school did a lot of student exchange in many languages, so we were not special visitors for them.

During the lunchtime in the homeroom class, I found a lot of surprising things for me! They usually had sandwiches and yoghurt for lunch. In Japan, our lunch box at school called bento was prepared by our mums. But in this school, they ate raw vegetables like celery, carrots, cabbage and so on. And most surprising thing was they ate a lot of crisps for their lunch. Usually in Japan, we think crisps are snacks. So I understand Japanese "bento" is unacceptable in England.



### Japanese Evening

Japanese Evening とは、英国人に日本の文化を紹介する行事です。

十年目となつた今年は、例年行われている剣道、茶道、書道、折り紙、あやとり、福笑い、箸、日本語、独楽、剣玉、昔あそびに、新しくジブリ作品の紹介と、ふろしきが加わりました。

日頃から交流のある近隣の学校の生徒たちや、英国人の方を招待し、今年は今まで一番多い、約一四〇名のお客様を迎えて、大盛況となりました。会場となつた二ユースホールにお客様が訪れるごとに企画も自分の企画に来てもらおうと、次々に声をかけて勧誘していました。

また、自分の企画に来てくださいた英國人の方には、たどたどしい英語ながら必死で自分の担当する文化を紹介しました。英国人の方も一緒にになって楽しみ、会場中で楽しそうに立教生と笑っている姿が多く見られました。

決して流暢な英語でなくとも、「自分の企画を楽しんでもらいたい」そんな意欲に満ち、英国人の方と交流する。

そして彼らの話す「生の英語」に触れる。これこそ本当に生きた英語の実践であると思います。

さらに英語だけではなく、何よりも Japanese Evening は、日本の文化を紹介する通じて、日本人と立教生、イギリスと日本を結ぶ架け橋となつていました。英語漬けになつた二時間が終わつた後は、「あーもう英語使いたくない!」という声がある一方で、「俺もつと話した!」という声もあちこちで聞かれました。英国人の方と共に真に楽しめたことができた、そんな一時となつた Japanese Evening だつたと思います。

## Japanese Evening



### Japanese Evening

五月九日の金曜日、Japanese Evening がありました。  
わたしの、参加した企画は、折り紙でした。

練習のときに、立方体の箱を作りました。六つの部品で作る折り紙なので、時間がかかるので、とてもうれしかったです。

本番になつて、また立方体の箱を作つみました。練習のときよりも、うまくできるやく出来上がつたときは、きれいに作れたので、とてもうれしかったです。

ようやく出来上がつたときは、きれいに作れたので、とてもうれしかったです。本番になつて、また立方体の箱を作つみました。練習のときよりも、うまくできるか心配でした。かどとかをきれいに合わせてずれがないようにしたり、あとがつくようにしたりして、どうやつたら、きれいにできるか考えて、工夫しながらできました。だから、練習よりもよくできて、工夫したかいがあつてよかったです。

お客様に作り方を教えるときになつて、わたしは、カメラの作り方を教えてあげました。そのときに、はしとはしをあわせるように気をつけながらやつてもらいました。カメラが出来たとき、喜んでもらえたのでうれしかつたです。

自分で作つた立方体の箱をプレゼントしてしたら、喜んでもらえて、安心しました。がんばつて作ったものをとてもよろこんでもらえたので、作つてよかつたと思いました。

イギリスの人々に、日本の文化を教えて分かってもらひつと、とてもうれしかつたので、来年の Japanese Evening も、イギリスの人たちに、いろいろな日本の文化を知つてもらつて、広めてほしいと思いました。



来年 2015 年に日本で第 23 回世界スカウトジャンボリーが開催されます。先日本校で開かれた第 10 回 Japanese evening の催しに、ホーシャム地区からイギリス代表となった 3 名のスカウト隊員が来校、一足早く日本文化を経験しました。来学期には、総勢 36 名のスカウト隊が本校を訪れ、翌年の日本でのジャンボリーに備えて本校生徒と交流します。以下に、Japanese evening の際、引率として来校したスカウト隊リーダーからのお礼の手紙を紹介します。

*Just wanted to say a big thank you for inviting us to the Japanese evening on Friday, the pupils were extremely polite and welcoming. We thoroughly enjoyed ourselves. The three Jamboree Scouts I took are even more excited about their trip to Japan next year - in fact I wish I was going with them! They can't wait to tell the rest of their Jamboree Unit when they next meet.*

*Thank you again*

*Kind regards*

世界スカウトジャンボリー代表来校

# ホームステイ

ホームステイ

高二一一 田中 美帆

ハーフターム開始日は、太陽が燐々として夏らしい天候であった。けれど、ハーフターム中は生憎の天気であると予報では言っていた。

私は、ホーシャムへ五人でホームステイを行った。五人という大人数を受け入れてくれた人はなんと一人暮らしのお婆さんであった。立教生五人に對してホストファミリー一人であつては、食事中に日本語が出てきてしまう。部屋は広いし、気軽にではあつたけれど、本来のホームステイの目的は、休息を取る事だけではなく、英人の方々と会話し、その文化に触れる事だと思う。そこで私は、夜お婆さんのところへ行き、「時間はありますか?」と聞いて、「はい。」という答えが返ってきた時には一緒に話してもらうことにした。最初は、「どうしたの?」と心配してくれていたが、私がただ英語の練習をしたいという旨を伝えると、快く引き受けた下さった。

お婆さんは絵画が好きなようであった。絵のことは全くわからない自分は、ナショナル・ギャラリーへ行つたときのアудイオングの乗などで学んだ知識をフル活用して話した。それから話は飛び、家族の事や日本の事、ある日には政府の話まで出てきた。政府の話は、民主的だと何だと難しい単語も多かつたが、辞書を使い何とか理解する事が出来た。お婆さんとの話は、三分という短い時間の時もあつたが、自分から話す事も沢山あつた。時にアクセントや文法が違えば親切に教えて下さり、学ぶこともたくさんあつた。とても楽しく充実したハーフタームであった。



ホームステイ

高三一二 東山 瑞季

ステイ先に着き、物がぎっしり詰まつたスーツケースを、ホストファミリーに手伝つてもらつてどうにかこうにか部屋まで運び入れた。一段落したところで、リビングのソファに座つて紅茶を飲んでいると、一人の小さな男の子が母親に連れられて挨拶をしに来た。

私が  
「ハロー」  
と言うと、その男の子も恥ずかしそうに口を開いて自己紹介をしてくれた。辛うじて聞き取れたのは、  
「ボンジュール」  
だけだった。

フランス語だということは分かるが、何を言つているのかは全くわからない。ホストマザーのアンさんに、彼が甥っ子でフランス語しか話せないこと、次日の日にはフランスに帰つてしまふこと、彼の名前がアレクサンдроだということを聞いた。正直その時は、私も英語すらよく話せるわけでもないのに、英語が全く通じない相手とどう接したらいいか分からなかつた。アレクサンдроは最初とてもシャイな



男の子のようだつたが、次第に私たちに心を許してくれたようで、いろいろなものを見せてくれたり、一緒に遊んだり、次の日の朝には起きたばかりの私たちのベッドの上で暴れまわつた。犬が「シャン」、猫が「シャ」、蝶が「パピヨン」だということも、彼が教えてくれた。文章で話されると、終始彼が何を言つているのかわからなかつたが、それでも私はアレクサンドロとコミュニケーションをとつていた。フランスに帰る時、私たちともつと遊びたいと駄々をこねたのは、仲良くなれた証拠だと思つ。

アレクサンドロに会つて、私はお互に言葉が通じなくてもコミュニケーションはとれるし、仲良くなれるのだということに気づいた。私は、英語の中でスピーキングが大の苦手だ。通じなかつたらどうしよう、文法を間違えたら恥ずかしい、と考えてしまい、どうしても口数が少なくなつて、でもフランス語の相手とここまでコミュニケーションがとれたのだから、きちんと勉強している英語ならもつと簡単なはずだと、今回のホームステイで自信を持つことができた。これからもつと積極的にコミュニケーションをとつてみよう。

## ブルーベル見学

高3-2 中村 瑛里佳

あたりは見渡すかぎり青いブルーベルの花畠が広がつてゐた。私にとって最初で最後のブルーベル見学に、私は乗り気ではなかつた。ちょうど前日に体調を崩したうえ、友達には行くほどのものではない、体調が悪いならやめておけと忠告されたのが大きな原因である。しかし、一人でドミトリーに残つて休んでいることに抵抗を感じたため、ブルーベル見学に行くことにした。森へはまだ行つたことがなかつたため、山道が苦手な私には不安があつた。まだ森に入ったころはきれいな植物はなく、期待もだんだん薄れていつてしまつた。

五分ほど歩くと、突然、目の前に広大なブルーベルの花畠が広がつた。ブルーベルは一つ一つは小さな花だが、数え切れないほどの花が広がつたその光景に私は目を奪われた。全体が青いじゅうたんのようで風に花畠全体が揺れると、

絵本の中の世界にいるような気分になつた。花からはかすかに甘いにおいが漂つてきて春の美しさを五感すべてを使って感じることができた。

今までこんなにたくさんの花を見ることがなかつたので、ブルーベル見学に行けたことにとても感激している。あの花を見ないという選択をしていて、写真だけを見ていたら、きっと後悔していたであろう。この学校でブルーベルを見られるのは今回が最初にして最後である。このようなすばらしい体験ができたことを嬉しく思う。



冷ましたがみんなでおいしくいただきが完成しました。できてで熱々のピザを元のガールガイドの活動へ参加しています。英語の勉強は始めたばかりという子もありますが、言葉の壁を乗り越え英国の同世代の子たちの中へ入りさまざまな体験をしていました。

一学期は、屋内でテントの張り方を学んだり、おかしをつくったり、また、キャンプ場や公園、パブリックフットバスでの活動もたくさんありました。ハイキングで鹿の大群の前を歩いたり、公園の池でカヤックをしたり、イギリスの大自然の中で英国の子どもたちと貴重な経験ができるいました。

毎週木曜日の夕食を他の生徒たちよりも早く終え、中学一年生と小学生女子は地元のガールガイドの活動へ参加しています。英語の勉強は始めたばかりという子もありますが、言葉の壁を乗り越え英国の同世代の子たちの中へ入りさまざまな体験をしていました。



二学期はどんな活動があるのでしょうか。今から楽しみです。今後もイギリスの自然を楽しみ、少しずつ同世代の英国の子どもとの英語をつかってのコミュニケーションも増えていくことを願っています。

## Girlguiding



## 現地校との交流

地元の学校との交流を積極的に行ってています。ここでは、交流先の学校からいただいたメッセージを紹介します。



*It was really nice of you to teach us Japanese numbers how to count to ten. Thank you for coming to our school. We had lots of fun.*



*I met lots of new friends in my group and I wish we could maybe keep in touch. I liked the chopstick party!*





# ミニ・アウティング

五月一六日（金）いよいよ待ちに待ったアウティングの日です。天気は見事なまでの快晴。コーチに乗り込み、さあ出発です。小学生と中学生は、かの有名な大政治家ウイン斯顿・チャーチルの生家でもあるブレナム宮殿と、オックスフォードへ行きました。

お昼頃ブレナム宮殿に到着。門をくぐると、大きな湖とその上にかかるヴァンブルの大橋に皆自然と「おおっ」「わあ」と感嘆の声が漏れます。

宮殿に入る前には腹ごしらえから、途中で寄ったサービス・エリアで買ったランチを持ってピクニックです。ナイフとフォークで食べる食事も良いけれど、青空の下で芝生の上に座り、手づかみで思い切り頬張るランチはまた格別です。食事の後は、宮殿のガーデン内にある大きな迷路へ。最初は「迷路なんて子供っぽい」などといふ声も聞こえてきましたが、いざ入つてみると

チャーチルの生家ブレナム宮殿と、オックスフォードへ



くになりながら迷路内を駆け回りました。お腹もいっぱいになり迷路でひとしきり遊んだとは、機関車に乗つて宮殿へ。ガイドさんの説明を聞きながら、豪華絢爛な宮殿の中を見学しました。皆壮麗な内装に目を奪われ、説明を聞く表情は真剣です。映画の撮影に使われたなどの裏話も聞くことができ、充実した時間を過ごすことができました。

宮殿見学の後はオックスフォードへ。お楽しみのショッピングの時間です。お小遣いを握りしめ、めいめいお目当てのお店へ向かいます。ディズニーのアリスギッズ販売店Alice's Shop、アイスクリーム店、クッキー屋さん。オックスフォード大学のパーカーを買った生徒もいました。夕飯もオックスフォードで。マクドナルドに行ったりカフェに行つたり班ごとに自由に過ごしました。日本食堂で久しぶりの日本の味を満喫した生徒もいたようです。

夕方、オックスフォードを後にして学校へ。友人たちと一緒にたくさん遊び、学び、素敵な一日となりました。皆さん、おつかれさまでした！



## ワインザー城訪問

高校二年生の五月一五日は、高校生活最大のイベントの一つ、I G C S E の試験の日だった。長い間勉強を続けてきた試験が木曜日に終わって、翌日はアウテイング。

「気がかりな試験が終わってから行けるって本当にうれしい！」  
ぎりぎりまでノートを見直し、生物の英単語を確認し、模試を解いて解いて粘った試験勉強。試験終わってアウテイング、本当に晴れ晴れとする。

行き先は、午前中は女王陛下の週末の城、ワインザー城、午後はロンドン也。アウティング・デイは今年一番の夏日となつた。気温は二〇度までぐんぐんあがつて、ワインザー城で衛兵交替を見る頃には、みんなシャツ一枚になつてゆく。ふさふさの黒い帽子（ベアスキン帽）をかぶつた衛兵は見ながら暑そうだが、誰も暑そうな顔はしないなかつた。汗ひとつ流していない。さすがは輝ける大英帝国の衛兵。

ちなみにこのベアスキン帽。カナダ生まれの熊一頭をつかつて帽子をひとつ作るのだ。衛兵は、警護兵と楽隊で構成されるといふことも発見した。「女性の衛兵が何人もいる」と女生徒たちがガヤガヤ。意外だ。二一世紀に生まれた子供たちにとって、女性の進出はもつと身近で一般的だと思つていたのに。彼らが社会人生活に慣れてリーダーシップを發揮する頃、もつと女性の衛兵が多くなるに違ひない。彼女達が働く世界ももつと女性が活躍しているだろう。

ワインザー城内（厳密には城内と礼拝堂）はワークシートを使って、ポイントを抑え見て見学する。

ワークシートがあると、「謎解き」のようで楽しめる。高一生たちにとつて面白か

つたのは何だつたろう？

◇ワインザー城修復費の捻出がきっかけで、バッキンガム宮殿が一般公開されたこと？

◇ワインザー城がもう千年もの歴史を持つ建築物であること？

◇トラファルガー海戦でネルソンを死に至らしめた銃弾？

◇「M D C C X C I X」—ヨーロッパ風の西暦表示が読めるようになったこと？

◇緑色のクジャク石でできた杯が自分よりも大きかつたこと？（ロシア皇帝から贈られたものだ）

見学とは新しいものを発見することだ。新鮮な驚きを得ることだ。高二年生の印象に何が残つただろう？

午後ロンドンに移つてから、一時間半のウォークラリーはちよつと大変だつた。先生たちが知恵を絞つたウォーカラリー観光。ヒントを元に次々に場所を探し当てるのだ。

はじめの『首相官邸ポイント』は皆が一齊にやつてきた。ダウニング通り十番地。その辺の人々に英語で聞くよう伝えてあつたこの住所。ロンドンン子なら誰でも知つている。

先生からももつたクイズも意外にすらすら。だいたいキヤメロン首相の名前は知つていたし、彼の顔もわかつた。（ただし、ジエームズ・キヤメロンとデイヴィッド・キヤメロンにはみごとに引っかかるつた）

ところがなかなか見つからない、『ローマ人と戦つたブリテン島の女王ポイント』と『三つのヒントを元に場所を探し当てるミレニアムポイント』。

首相官邸近くは警備員のいる建物が多いから、ちやつかり警備員をつかまえて尋ねる生徒たちもいた。天気のいい中、あちこち探し回つて「せんせーい、みいづ

けたー」と走る生徒たち。

ラストポイントは、全ポイントで1つずつヒントを貢つて探す『ナイチンゲール像ポイント』。「疲れた」と文句言いながら嘆きながら、わいわい探して歩き回つたウォーカラリーは、忘れられない出来事の一つになるだろう。

この日、ワインザー城には女王旗がひるがえつていて。姿は見られないけれども、在位六〇年以上にも及ぶエリザベス女王と同じ場所にいた一日。

天気がよくて暑くつて、ロンドン内を駆け回つた一日。思い出のページにくつきり刻まれたことだ。

この日、ワインザー城には女王旗がひるがえつていた。姿は見られないけれども、在位六〇年以上にも及ぶエリザベス女王と同じ場所にいた一日。

ワインザー城に行って

高二一一 佐藤 純歩

「高二にもなつてお城！？」

これが、アウテイングでワインザー城に行くと聞いた時の私の素直な感想だ。だから、行く前もなんだか憂鬱な気分だつた。

しかし、コーチの窓からワインザー城の外観を見た瞬間、テンションが一気に上がつた。想像していたよりも、遙かに立派な城だつた。

コーチを降りて城に入るとすぐに衛兵交代のセレモニーを見た。バッキンガム宮殿の衛兵交代は柵と柵の間に顔を入れて遠くからしか見られないのに、ワインザー城では至近距離で見ることができた。衛兵は黒く長いベアスキン帽をかぶり、赤と黒の長袖ズボンを身にまとつた。真夏のようないい日差しが照りつけるアウテイング日和で、見ている私は今すぐにセーターを脱ぎたいと思うくらいなのに、衛兵はもの凄く険しい顔をしてピシパシと動いているのを見て感心した。セレモニーが終わると衛兵と写真を撮つた。先生が、彼らは任務中だから笑わないとおつしやつていて通り、まったく笑わず、撮つた後に溜め息までついていた。暑さと多勢との写真撮影でお疲れのようだつた。

ワインザー城を見渡すと、一際高いラウンド・タワーが見える。この日はこのタワーの上に旗が揚がつていた。これは、エリザベス女王がこの城にいますよ、という印だそうだ。女王は普段、バッキンガム宮殿とワインザー城のどちらかにいるそうだ。この日、そう遠くない距離でワインザー城の美しい緑や建物、清々しい空気を女王とともに味わえたかと思うとなんとも特別な気分になつた。



## イギリスでのサッカー生活

高三一二 岡田 元希

小学一年生から中学三年生まで、僕はずっと野球をやつてきた。高校・大学でも野球を続けるつもりでいたし、それしかないと思つていてた。だが人生はそう予想通りにはいかない。僕は今イギリスの学校に通い、中学三年生の秋からサッカーを始め、三年の月日が流れ、高校生活最後の試合、そのピッチ上に立つている。全て三年前の自分が予想だにしなかつたことだ。事の発端は、この立教英國学院に来たときまでさかのぼる。

どの部活に入ろうか。イギリスに来たらかりの僕の一番の悩みはこれだつた。野球がないし、他に得意なスポーツもない。まるで闇の中に突然放り込まれたような気分だつた。そんな僕を先輩が誘つてくれたのと、同学年にサッカー部が二人いたという理由で僕はサッカー部に入部した。この選択は、僕のイギリス生活を大きく変えていった。

初心者の僕はもちろんチームで一番下手だつた。それでも下手は下手なりに練習に食らいついていった。野球を始めたばかりの頃以来の経験だつた。そして、チームにゴールキーパーがないのと、キーパーっぽい体格をしているという二つの理由から僕はゴールキーパーという重要な役割を任された。日々の練習は上手くいかなくて、つらくて、苦しかつた。それでも良いプレーができたときに仲間の笑顔が見られたから、自分の中で何とも変えることができない達成感があつたから、僕はサッカーを続けてこれた。

そして、僕は最後の試合を迎えた。高校生活最後の試合は、勝つて笑顔で終えたかった。だからこそ、いつもの倍以上に緊張して足が震えていた。今までの自分を全て出そと意気込み、試合開始のホイツスルが鳴つた。二点リードで前半を折り返し、

## 部活動を通して



## ウィンブルドンテニス観戦

中3 吉川 由望

私がこの学校へ留学しなければ一生でウィンブルドンへ行く機会はなかつたと思ひます。前日の就寝は9時前、そして起床は4時半という立教生だけでなく学校全体が力を入れている気合が入つてゐる行事なんだと実感しました。私もここに来る前からテニス好きの友達にウィンブルドンのことは聞いていたので、まさか私がその場に行けるとは思つてもいなかつたので、とても楽しみでした。

いつもだったらまだ起床すらしていない時間から、長い列に小5から高3の先輩までがそろつて並び、前日に高2の先輩が詰めて下さったパックランチを食べたり、アイスを買いに行つたりなど、並んでいる時間は思ったよりも早く過ぎてゆきました。



後半。相手にフリー・キックが与えられた。ゴールに向かつて弧を描いたボールは僕の手に吸い込まれた、と思った。ボールが手から弾かれたと感じたときにはもう、相手がゴールにボールを押し込んでいた。自分ミスだと地面を見つめたその時、「気にすんな！ここからだろ。切り換えていこうぜ！」

自分の想像していた未来とは全く違うけれど、僕はこの三年間を後悔していない。自分が今までやつたことのないスポーツを高校生活の中でやり遂げたということ、これ以上はない仲間たちとの最後の試合を勝利で飾れたということ、サッカーを全力で楽しめたということは、僕にとって最高の宝物となつた。そして最後に、今まで一緒にサッカーをやつてきた仲間に僕は心からの「ありがとう」を伝えたい。

「ありがとう」という声が聞こえた。その声のおかげで僕は冷静になれた。絶対に後悔したくなかったからその後も全力で声を出し、一生懸命にプレーした。そして僕らは、三対一というスコアで勝つことができた。



校長先生がおっしゃったように今回は雨の影響で日程がずれ、見ることができないはずだった錦織選手の試合が延長され、私たちが行った日に見ることができました。いつもテレビで見ている錦織選手を間近で見ることができ感動しました。昼食は芝生で食べ、天気が良かったのでとても気持ち良かったです。

午後は天気が崩れ、試合が中止になつたりと予想外なことが起きましたが、全然知らなかつたテニスのことを知る良い機会になりました。期末試験が終わり日本へ帰る日が近づいてきました。日本にいる家族や友達に良いお土産話ができそうです。



## 剣道

高二一一 田中 紗菜

私はこの前はじめて剣道の試合に出ました。この試合は唯一の高三の先輩の引退試合でもありました。行なわれたのは、ロンドン付近のスポーツセンター内にある、わかれ道場というところです。私達がスポーツセンターに着き、お昼ご飯を食べていると、竹刀ケースらしい物を持った、私たちの二、三倍は大きいおじさん達が見え、かなり不安になりました。

いざ着替えて道場へ向かうと、そこは普通の体育館コートでした。立教つてちやんとした道場があつてすごいのかもしれない、と思いました。準備体操の前に、みんなで雑巾がけ競走をするそうです。ちつちい子にまざつて剣道部全員で参加しました。終わつた後に気持ちが少しひきしまつた気がしました。その後は大人も子供も一つの輪になつて準備体操をします。外国人特有のかわいい「いちにいさんじいごおろくしあはち」でしたが、その割に気合がありすぎていて、少し面白く思いました。試合です。

一試合目は、小さい男の子とでした。体格が私よりはるかに小さいので、勝てる！と思いましたが、先に一本とられてしましました。その後、一本取り返せましたが、安心と焦りで体が急に重くなり、引き分けになつてしましました。

二試合目は、一試合目より少し背の高い女子でした。さつきの男の子も、この女の子もそうですが、とにかく前に来て面を打つてきます。試合では、自分からかいと打てないと自覚し、とにかくがむしゃらに面を打ちました。観客の人は、一本入つても入らなくても、打てば拍手をし



てくれます。私は二本目が入つて勝ちが決まりました。私はとても軽かったです。何より先輩が、心はとても軽かったです。何より先輩に、とってもきれいに面が入つていましたよ。

とほめられたのが一番嬉しく思いました。試合の後は合同稽古をするのが剣道のしきたりです。

試合には参加しなかつた大人の方々や、有段者の人達に稽古をつけてもらいました。皆さんそれぞれ私の弱点を見抜いて、親切に教えてくれました。その後には、試合と同じ形式の稽古をいろいろな人とする地稽古。あえて打たせてくれる人、一方的にこてんぱんにしてくれる人、交互に打つてくれる人、と様々でした。部活の時よりずっと大人數としたのに、私は楽しくて、全く疲れを感じませんでした。スポーツをして心から楽しく感じたのは、はじめてかもしれません。

引退まであと一年、この試合で感じたことも生かしてまだまだ成長していきたい

## 涙の引退試合 バレーボール部

五月一七日土曜日。

立教英國学院バレーボール部

三年生の引退試合なのです。この日のためにバレー部は忙しい学校生活の間を縫つて練習に励んできました。

会場は屋外で、慣れない芝生の上で試合です。幸い天気は曇りだったため、暑すぎることも眩しすぎることもなくゲームを進めることができました。実力はほぼ互角、一点取れば一点返される。男女ともに緊迫した試合が続きました。

結果、男子チームは一敗してしまい準優勝となりましたが、女子チームは見事優勝することができました。女子チームには、主催の「Pson College」から盾が授与されました。

「勝つことはできなかつたけれど、一年間このメンバーでやつてこれてよかつた。みんな、ついてきてくれてありがとう。」

試合終了後、そう語つた男子キヤブテンの目には涙が浮かんでいました。

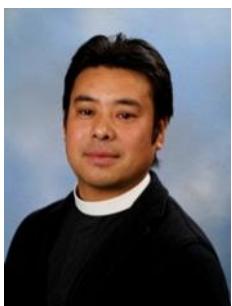
女子の方では、後輩から先輩に引退記念品が手渡され、対戦相手のメンバーも含めて記念撮影が行われました。

次の試合からは新チームで臨むことになります。新キヤブテンの下、これまでのチームに負けないぐらいバレー部に

楽しんで取り組み、素晴らしいチームになってくれることを期待しています。



## チャップレンより



林チャップレンは立教英國学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業にはさまざまなお話をしてください。

### 人間の品格

チャップレン 司祭 林 和広

四年に一度のワールドカップがブラジルで開催され、世界中が注目しています。各国代表がプライド、誇りを持って戦い、熱戦が繰り広げられています。選手たちのプレーだけでなく、選手の振る舞い、サポートの振る舞いなどがメディアに取り上げられるときもあります。その国の選手、サポートの品格というものに目が注がれます。



チャップレン(学校付きの牧師)として本学院に来てから、立教英國学院生としての品格、プライドという言葉を耳にします。振り返れば、自分が高校生や大学生の頃も「我が校の生徒としての品格、プライドを持つて」という言葉を何度も聞いていたように思います。数年前には品格ブームで様々な本が出版されていましたことを思い出しますが、本学院の生徒に求められている品格とはどのようなものなのかを自分なりに思い巡らせてみました。

Pro Deo et Patria(プロ・デオ・エト・パ

トリア・神のため、世界のために)。これは本学院の生徒たちのブレザーの胸にある校章に刻まれている言葉です。これは日本の立教学院の教育理念を示す言葉です。だから、立教学院では知の遺産を受け継ぎながら、常に真理を探し求める人を育てることを目的としています。そして、*Pro Patria*とは直訳すれば「国のために」となりますが、この言葉を「私たちの世界、社会、隣人のために」ととらえ、「世界、社会の隣人に愛し、共に生きることのできる人を育てる」ことを理念としています。この理念の土台にあるのは、一人ひとりが神に愛された存在であるというキリスト教の精神であり、キリスト教に基づく全人教育を掲げている本学院もこの精神を大切にしているのです。

私はチャップレンとして聖書の授業も担当しています。ほとんどの生徒がクリスチヤンではありませんが、小学部から高等部までの全ての学年にこの授業があります。受験科目でもなく、全く馴染みのない「聖書」の授業を受ける生徒はどのような気持ちで受けているのだろうか、そして、一日の中の貴重な五〇分を頂いて「聖書」の授業をするにあたり、何を学ぶか、ということは本学院に派遣されることが決まった時からいつも考えていることです。静かに聖書を読んだり、「キリスト教と映画」と題して映画を見て、視覚を通してキリスト教、歴史を学んだり、キリスト教の靈性に基づいて書かれた著作を読んだりしていることです。極めてシンプルなことです。

本学院は眞の国际人を育てることを教

育理念の一つとして掲げています。そのために様々な知識、語学力を習得するため必死で学んでいます。これらは国際人にとって重要なものです。それに加えて大切な素養とは、広い地平でこの世界を見渡せる目と、他者を認め、大切に想う心だと思います。国際人とはつながりを構築する人です。知識や語学力だけでは本当のつながりは構築できません。

私自身も生徒との授業を通して、新しく気づかれることがたくさんあります。生徒たちの素朴な質問や疑問や感想によって目が開かれることが何度もあります。授業を通して私がこれらの素養を身につけるノウハウを教えているのではなく、一緒にになって探究する時間となっています。品格とは辞書によれば、人の持つ気高さや上品さという意味を持つそうですが、当然、それは「自分は他のものとは違う」という優越感を持つて振る舞うことではないでしょうか。

品格「Dignity」とは、「尊厳」という意味もあります。自分はこの世界を超えた存在によって創造され、愛されている者であるという尊厳を持ち、そして、他者を自分と同じように尊く、愛されている存在であることを認めることだと思います。品格のある人は、一人ひとりの人間を尊い存在として受容し、つながりを持つことができる人のことだと思います。

本学院の生徒が学問的な知識だけではなく、学院生活における学び、寮生活、スポーツやその他全ての活動を通して、人として最も大切な品格を養つて頂ければ幸い



## 着任



4月に6名の先生が着任されました。写真左より、市川公平先生（社会）、齋藤桃子先生（国語）、高野聰子先生（社会）、奥野由香先生（キッチン スーパーバイザー）、梅津静子先生（社会）、佐藤忠博先生（数学）。共に学び良き時間を過ごされますように。

## 離任



今学期をもって、ラヴグローヴ先生（英会話）、パーク先生（英会話）が離任されます。今までありがとうございました。

**立教英國学院通信の電子配信への切り替えにご協力下さい。ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。**

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk